

<第 85 回 HSE セミナー 講演内容>

■テーマ：「地域に根ざした薬局のブランド戦略」

■講師：大野 泰規 氏（株式会社ヴェルペンファルマ 代表取締役専務）

「病院があれば薬局がある」そんな門前受取型のビジネスモデルから転換がいま求められている。新設された「かかりつけ」制度に取り組むためには、薬局としてどんなことが求められるのだろうか。その一つに「ブランド戦略」があると考えられる。通常、企業においてブランド戦略は重要な戦略の一つではあるが、薬局業界は少し出遅れていると感じる。かかりつけだけではなく採用活動にも重要なウェイトを占める、このブランド戦略のあり方を考えたいと思う。地域に根差す薬局だからこそ、地域に向けたメッセージの発信が必要である。

<講師紹介>

昭和 42 年、埼玉県飯能市生まれ。平成 3 年東邦大学薬学部卒業。田辺製薬株式会社（現・田辺三菱製薬）にて MR を経験した後、有限会社ドラッグおおの（現・株式会社ヴェルペンファルマ）にて勤務。一貫して地域での活動にこだわり、飯能周辺地域での薬局や介護、障がい者事業に従事する。昭和 40 年に 1 号店を開局し、現在は 9 店舗を運営。そのほか介護施設運営（2 施設）、ケアプランセンター、訪問介護、宅食事業、障がい者・障がい自動相談支援センターなど地域の地域包括ケアそして健康を担うサービスを展開している。

■テーマ：「ポリファーマシーとは」～その取り組みについて～

■講師：高崎 雅彦 氏（独立行政法人国立病院機構 栃木医療センター 薬剤部長）

日本の抱える大きな問題の一つに「ポリファーマシー」があげられる。世界的に見ても日本の様な多剤投与は珍しい。減薬は世界の薬剤師に求められる重要課題である。

ではなぜポリファーマシーが起きるのだろうか。そのメカニズムを知り、問題の解決への道を探ってみたい。ある医師が「禁忌や副作用がなく多剤投与を行える知識と技術を評価して欲しい」という話があった。果たして本当に多剤投与が必要なのだろうか。より現場で減薬が行えるような知識を持ちたいと思う。この取り組みが薬剤師に与えられている「調剤権」ではないのか。

<講師紹介>

昭和 58 年 4 月、国立療養所西札幌病院に勤務。昭和 62 年 10 月 国立療養所八雲病院に勤務。平成 9 年 4 月、国立札幌病院薬剤科副薬剤科長に就任。国立弟子屈病院薬剤科長、国立療養所八雲病院薬剤科長、道北病院薬剤科長を経て、平成 22 年 4 月、北海道がんセンター薬剤科長に就任。平成 26 年 4 月より栃木医療センター。薬剤科長を経て、平成 27 年 4 月より薬剤部長。

■テーマ：「広がり続ける終活」～地域社会における役割とは～

■講師：水上 由輝徳 氏（NPO 法人 終活サポートセンター 理事）

世の中だれしもが「バットエンディング」よりも「ハッピーエンディング」を求めると思う。いま時代は自分の死について考え取り組むことへと向かっている。近年活動を広げる「終活」について今回は考えたい。広がる活動の要因に高齢者のビヘイビアが隠されているのではないだろうか。そしてそこに薬局は関与することはできないのかを考えたい。これから求められる薬局機能に「薬以外のコンテンツ」は必要不可欠である。薬局が薬の交換所で終わるかどうかは、経営者のこれからの戦略と努力次第といえる。かかりつけ薬剤師のコンセプトは、同意書取得から看取りまでである。「終活」は必要な知識の一つといえるのではないだろうか。

<講師紹介>

墓地や納骨堂販売・葬儀施行の経験から終活の道へ。

千葉県松戸市常盤平団地での行政・企業・住民合同の終活シンポジウム開催や都道府県初となる千葉県発行エンディングノート監修、ドラッグストアショー、各地シニアクラブや社会福祉協議会、団地自治会などでの講演、地域ケア会議でのアドバイザー、寺院や葬儀社コンサルとしても活動中。自主イベント「終活大学」は終活を生涯学習と捉え 800 人規模の小フェアとして企業・行政と運営しブランディングしている。NPO 法人としてはこれまでに 28000 人を超える方の相談実績。2017 年全国ネットワーク化を進行中。